

解釈的現象学的分析（IPA）の方法論

Methodology of interpretative phenomenological analysis (IPA)

伊 賀 光 屋

本稿は主にJ.A. Smith et al., (2009) に依拠して、IPAを概説しそれに基づいてIPAの問題点を論ずる。IPAは一人称の経験談を三人称の視点から分析する、現象学、解釈学、そして個性記述学から影響を受けた心理学的方法論である。IPAには様々な批判がなされているが、本稿ではその最大の問題点は二重の解釈といいながら、一人称+三人称の方法論に二人称の方法論が紛れ込んでいる点にあることを論じている。

1. IPAの理論的背景

(1) 解釈的現象学的分析とは何か

IPAを支える理論的支柱は現象学、解釈学、そして個性記述学(イディオグラフィ)の三つであるといわれる。IPAは「人間の生きられた経験」を予め定義づけられたカテゴリー体系に従ってではなく、それ自身の言葉で可能な限り表現されるように詳細に調べる、いいかえると人々が自らの経験に与えた意味を調べるという意味で現象学的である。また人間は存在する限り、自分に関わる物や人々を解釈せざるをえない、いいかえると現象学的探究は最初から解釈過程であるとする点で解釈学的である。さらに研究対象となった話者を特定の状況の中に位置づけ、その個人的視点を調べ、経験の個別的全体性を保ちながら一般化を目指すという意味でイディオグラフィックであると言える。

心理学主流派の実証主義に批判的であった、J.A.Smithは、物や出来事それ自体の客観的陳述ではなくそれらについての一個人の個人的知覚に関心を持つ現象学と、個々人が物や出来事に帰属させる意味は人々が相互行為の中で生み出し、また理解するとの立場に立つシンボリック・インターアクションニズムの二つの知的伝統から影響を受けており、本来現象学的グラウンデッドセオリーと呼ぶべきであったが(J.A. Smith, 1996: 263), 彼は自らの立場を「解釈的現象学的分析」(interpretative phenomenological analysis: IPA)と呼んだ。それは、IPAが研究対象者の世界の見方を彼ら自身の「内側からの視点」で理解することを目指すものの、それは直接にまた完全に成し遂げることができず、研究者自身の理解に依存し補われざるをえない(研究者の前理解と解釈学的循環)ことに気づいているからだ。こうした二重の解釈が必要であることから、あえて解釈的現象学的分析という言葉を選んだ。

このように、IPAはハイデガーの解釈学的現象学(hermeneutische Phänomenologie)の影響を強く受けている。人間(現存在)は世界の中に産み落とされ(被投)、死ぬまで世界内の様々な物や人々(存在者)と関わり(経験し)ながら、それらが自分にとってどのような意味をもつのかを理解しつつ、自らの可能性を生き抜く(投企)。このように人間は存在する限り、自分に関わる物や人々を解釈せざるをえない。これが解釈学的現象学の基本的主張である。解釈学的現象学は、存在論としての現象学と認識論としての解釈学とを接合した哲学的見解である。解釈的現象学的分析は解釈学的現象学に基づく方法論(知識の組み立て方)である。そして、①研究対象者である当事者(話者)が自らの経験を解釈して語ったことを、②研究者である

聞き手が解釈し直すという二重の解釈過程を実践する。IPAでは①のプロセスは主に半構造化聞き取り法を用いるデータ収集のプロセス（2節）であり、②のプロセスが解釈学的循環を用いた分析プロセス（3節）である。

(2) 共感的解釈学と疑問を問う解釈学

P.Ricoeur(1965)は解釈学には二つの系譜があるとする。第一の系譜はアリストテレスの現実を言葉で表現することが解釈であるとの主張に始まり、表現されている直接的意味を理解しようとする立場であって、「意味の想起としての解釈学」と呼ばれた。第二の系譜は聖書釈義の伝統から生まれ象徴的表現に示された直接的意味からそれが類比している隠された意味を理解しようという立場であって、「懐疑の実践としての解釈学」と呼ばれた。

これに対して、J.A. Smith et al.(2009)は前者を話者の経験をその話者自身の言葉で再構成し、部内者の視点に立つと話者の経験がどのように見えるかを明らかにする解釈の方法として捉えた。また後者は、その現象に光を当てて、話者が語らなかったこと、語りたがらなかったことを明らかにすべく部外者の理論的視点に立ち、語られた経験の背後に隠されたことを明らかにする解釈の方法として捉えた。そして、後者は懐疑の実践としての批判的解釈学と異なり、あくまでも話者の語った話を内側から聞き、そのトランスクリプトをテキスト内的に読みながら、とくに用いられた隠喩の意味や用いられた時制などの時間的構成に着目して疑問点を研究者が解釈するやり方を「疑問を問う解釈学」と呼んだ。そしてこれと共感的解釈学（浮上してきた実質的テーマに取り組む解釈学）とを併用する二重の解釈学という方法論を打ち立てた。

このように、IPAは話者の語った経験の①顕在の意味が明確になるように促し、また②潜在的な隠された意味を解釈して顕在化し、③話者と聞き手たる研究者本人、さらには報告書の読者に理解出来るようにする分析方法である。

話者の語った経験は、半構造化インタビューや非構造化インタビューで蒐集され文字化されたトランスクリプトデータの中にテキスト化されている。

①の顕在の意味の明確化は、2節の分析ステップの2の記述的コメントと言語学的コメントの所までで行われる。②の潜在的な隠された意味の解釈は、分析ステップ2の概念的コメント、ステップ3の浮上するテーマの展開、そしてステップ4のテーマ間結合の解明、そしてステップ6の事例横断的テーマパターンの解明のところで行われる。③は報告書の執筆という形で行われる。

(3) 現象学の影響

現象学は経験を研究する哲学的アプローチであり、強調点や関心点の異なる様々な説があるが、共通している点是我々によって生かれた世界を構成する事象としての人間の経験に関心があるということだ。

① フッサールの現象学

フッサールは経験をそれが起こったように、またそれ自身の観点から調べられるべきだと考えた。そして人間が所与の現象についての自分の経験を厳密に知ることによってその本質的特性を捉える方法に関心を持っていた。フッサールは「事象そのものへ」戻るべきだと論じるが、この事象とは意識の経験的内容であり、世界の中のものについての既存のカテゴリー体系を括弧入れして判断停止し、自身の経験内容それ自体に立ち返る。このようなあたりまえとされた世界を括弧に入れ、自然的態度によって成り立つ諸対象や世界を「諸対象についての意識」に変更することを現象学的還元という。現象学的還元によって現れる個別の経験を記述することが現象学の第一歩である。次に、自然的態度による素朴な偏見としての世界を遮断し、自然的世界で作用している超越論的主観によって「世界を構成する」ために形相的還元をする。形相的還元とは個別的事実の実在性を超えた非現実的本質を自由な想像的変更によって把握する方法である。自由な想像的変更とは、過去の様々な経験や新しい経験の想像を加えて、想像しうる多様な経験の変種とその境界を考えることである。形相的還元とは自由な想像的変更により多様な経験に共通する特性を把握することである。最後に形相的還元によってえられた純粹に心理的なものの本質に対して超越論的還元を行い超越論的主観性、すなわち意識それ自体を捉えるようとする。

IPAは意識内容すなわち「我々の生きられた経験」を研究対象とし、現象学的還元によってそれを記述するという点でフッサールに従っている。しかし、フッサールは意識の志向性という包括のプロセスをフッサール自身の一人称のプロセスを内省して論じているが、IPAは研究者自身の経験ではなく他人の意識内容を研究しており、フッサールのやり方をそのまま踏襲することはできない。また、フッサールは現象学的還元、形相的還元、そして超越論的還元の三つの段階を経て事実学、形相学、そして現象学へと到る企図をもっていたが、IPAは事実学たる記述心理学に主軸を置き、暫定的に形相学たる現象学的心理学に片足を踏み入れるが、あくまでも特定の人の特定の経験を捉えることに主眼を置いている。そして、日常生活の中で無意識に経験した出来事に関心をもつと言うよりは、時間的に隔たっていようと一つの共通の意味づけによって結びついている包括的な経験的出来事に関心をもっている。たとえば腰痛患者のアイデンティティの変遷を解釈したJ.A. Smithらの研究(J.A. Smith et al.,2003)に見られるような肉体的な経験が感情的に表現され、それを認知的に反省し、それらの経験に関わる日常生活の調整や選択を実存的に行ったことについての話者の語りはIPAの取り上げる経験の典型例である。

② ハイデガー、メルロー・ポンティ、サルトルの現象学

ハイデガーはフッサールの超越論的企てから離脱して、解釈学や実存を強調する現象学へと向かった。人間はさまざまなものや人々、そしてそれらとの間の関係性、さらにはそれらについて伝えあう時に用いる言語からなる、既に存在している世界の中に投げ込まれている。こうした過去から引き受けた世界の諸可能性を選択しつつ、未来に向けて自己の可能性に身を投じる。これが人間存在のあり方であり、存在するということは自らが投げ込まれている世界を理解する（意味づける）とともに、その理解にもとづいて自らの可能性を探っていることだという。こうしたハイデガーの考え方に基づいて、IPAは人々が世界の中で世界を理解し自らを投企するという「生きられた経験」を、すなわち人々にとっての世界とその経験の意味を、理解することを課題とする。

メルロー・ポンティは身体的主観(sujet charnel)ということを使う。経験は、一方で何々についての経験（志向性）であると同時に、それは私の経験であるという性格をもつ。経験は世界内の主体自身の身体化された位置に属しているので、他者の経験の彼らにとっての意味は、それを観察している私にとっての意味とは異なる。他者の苦しみを共感できたとしても、その苦しみの経験や意味を完全に共有することはできない。経験の「私のものという性格」や「何々についてのという性格」の志向的な意味は、身体的主観に固有のものである。我々は他者の体験流の焦点的位置に立つことは空間的にも時間的にもできない。他者を取りまく物や人々と彼との間のやりとりやその時間的流れの中で、彼の身体が占めている視野の焦点に立つことはできないのだ。そのために聞き手は話し手の経験を解釈せざるをえないのだ。

サルトルは「実存は本質に先行する」という表現で、自己は常に未来に向かって投企していて、常に生成途上にあるという。またこうした世界内投企は、不可避的に他者達との遭遇をもたらし、世界が自己だけのものではなく、自らも投企している他者達の存在によって私の世界内経験が形作られると主張する。IPAはこれを承けて話者の経験を分析するときに、その経験が常に生成途上のものであること、またその経験は話者と関係性をもつ他者達の自己生成的関与によって影響されていることを念頭に置かなければならないとする。

(4) 解釈学の影響

解釈学は聖書釈義、法解釈、そして言語的・文芸的分析の分野で長い間適用されてきた。そして人間科学の方法論として姿を現すのは19世紀末以降のことである。解釈学は解釈の理論であり、解釈それ自体の目的と方法とは何か、著者の意図やもとの意味を明らかにすることは可能か、テキスト生産の文脈とテキスト解釈の文脈はどのような関係にあるのかなどを問う認識論である。

なお、解的現象学的分析が解釈学的ではなく解的と表現された理由は、IPAは解釈学に基づく解的方法論であることを表現するためである(Smith et al.,2009:21-22)。

① シュライエルマッハーの解釈学

シュライエルマッハー以前の解釈学は、文法的解釈、歴史的解釈、美学的・修辭的解釈、そして事実上の解釈というように、解釈の過程で絡み合っている諸機能を別個に捉えていたが、シュライエルマッハーは普遍妥当的解釈のための方法、すなわち追構成としての理解の方法を確立したと言われる(W. Dilthey, 1900)。

シュライエルマッハーはテキストの解釈には言語的解釈と心情的解釈が含まれるという。言語的解釈とは著者の属する言語共同体の慣行や期待によってそのテキストの中のある陳述の意味を解釈することであり、心情的解釈とは著者がテキスト生産する中でテキストに押しつけた個人的意味を解釈することである。IPAが研究対象者のインタビュー・データに対して行っていることはこの心情的解釈にはかならない。そして、IPAのトランスクリプト解釈では、話者の自身の経験に対する解釈に、IPA研究者が同種の経験をした多くの人々からのデータを縦覧して浮上したテーマ結合や先行研究のレビューからえている先験的理解が「付加価値」として上乘せされる。

② ハイデガーの解釈学

ハイデガーは現存在が世界の中で生きた時間や経験に接近するには解釈によるよりないことを明らかにした。そして、ファインメノン(現象)の語源的解釈をもとに、現象とは一方であらわなものであることもあれば、何々であるように見えるにすぎないもの(仮象)であることもあることを指摘する。前者はリクールの意味の想起としての解釈学が対象とする話者の言明行為の中に顕在化している現象であり、後者は懐疑の実践としての解釈学が対象とする潜在的な隠された現象である。

またハイデガーはロゴス(学)の概念を検討してロゴスとは「語りにおいてそれについて語られている当のものをあらわならしめる」ことだとする。

こうしてハイデガーにとって現象学とは語りの中で語られている当のもののあらわな面と見せかけの面とともに、語っている者や語り合っている者たちに見えるようにさせることだという。

ここから解釈的現象学的分析とは、「話者が語った経験の顕在の意味があらわになるように促し、また潜在的な隠された意味を解釈して顕在化し、話者と聞き手たる研究者、あるいは報告書の読者に理解出来るようにする」ことだということになる。このように現象学とは解釈活動であり、解釈は先行理解(予持、予視、予握)に基づかざるをえないとするハイデガーの考え方を踏襲し、IPA研究では先行理解の括弧入れと内省を結びつけた解釈学的循環をデータ分析の中で実践する。

③ ガダマーの解釈学

ガダマーはテキスト解釈に関心をもち、それへの伝統の影響を強調する。

「テキストを理解しようとする者はつねに投企を遂行している。解釈者はテキストの最初の意味が現れると、すぐにテキスト全体の意味をまえて投じてみる。・・・そのような先行投企はテキストの意味をさらに深く理解することによってえられた成果からつねに修正されるのであるが、そこに書かれているものを理解するとは、そのような先行投企を練り上げていくことなのである。・・・解釈は先行概念から始まり、この概念はいっそう適切な概念によって置き換えられる。この絶えざる新たな投企こそが理解と解釈の運動を構成する。」(H.G. Gadamer, 1975: 訳書423頁)

このようにテキストの読みや理解は、先行理解とテキストそれ自体との間の対話に従事することだというガダマーの考え方に倣ってIPAでは2節の分析ステップ1「読みと読み直し」分析ステップ2コメント付け、分析ステップ3テーマの浮上、分析ステップ4テーマ間結合の発見という解釈手続を進める。また、ガダマーは解釈にあたって先行理解の自覚が必要であることを強調して次のように言う。

「肝要なのは、自分自身が先入見にとらわれていることを自覚することである。それによってテキストそのものが他者性を示すようになるのであり、またそれによってテキストは解釈者自身の先行意見にテキスト

が語る事柄の真理を対抗させる可能性を獲得するのである。」（H.G. Gadamer, 1975: 訳書427頁）

これに従って、IPAではステップ2の概念的コメント付けが疑問形で書かれる。またガダマーは対話について次のように要っている。

「問う技法としての対話術の真価は、ただ問い方を知る者が問い（未決定の状態への方向）をしっかりとつかまえているということによってのみ示される。・・・問答をすることは・・・相手の意見が事象に照らしてどれほど重要かということを実際に検討することである。」（H.G. Gadamer, 1975: 訳書567-568頁）

ここからIPAでは半構造化インタビュー法や非構造化インタビュー法の実践で自由回答法による未決性の担保が強調されるのである。

IPAではテキストの読みと理解は古いもの（先行理解）と新しいもの（テキストそれ自体）との間で行う対話だと考え、テキスト内のある部分の解釈は読者のテキスト解釈の歴史（既に読んで理解したこと）の文脈の中で考えられ、この歴史は新しいテキスト部分との出会いによって変化していくとする。つまりガダマーのテキスト理解は先行投企の練り上げであるという解釈観は解釈学的循環の論理と接合された。ある部分を読み直すときには既に読んだ全体との対話が、全体を読み直すときには既に読んだ部分との対話が行われ、読み直すたびに部分の解釈も全体の解釈も修正され練り上げられていくというのだ。この部分と全体との関係は、単一の語とそれが埋め込まれている文章との関係のみならず、単一の節とテキスト全体、特定の時点でのインタビュー・トランスクリプトとその話者に対して数回行われたインタビューの全てのトランスクリプト、一人に対して行われたインタビューと調査プロジェクトで行われた全てのインタビュー、ある話者の単一の経験とその話者の生活全体など様々なレベルで存在する。だから、その様々なレベルごとで対話と解釈学的循環が成立する。こうした考えから、IPAでは分析プロセス（執筆プロセスも含めて）を直線的で一回限りの進行とせず、反復的に行きつ戻りつ進めることにしている。

研究者は自分の先行理解をデータ分析の前に気づいているとは限らない。だから解釈学的循環の反省の中でそれに気づき括弧入れをする必要がある。この場合解釈学的循環における全体とは研究者のこれまでにやってきた研究の蓄積全体であり、部分は今行っている研究プロジェクトの中の新しい一話者との出会いである。新しい話者の話を理解する時に、それまでの研究で知り得たと思っていることを括弧に入れ、その話者の話をその話者の視点で理解することに努め、そうして理解したことを、これまでの理解の蓄積全体に照らして再解釈し、理解の蓄積の中に組み入れていく。これがIPA研究における解釈学的循環の実際のやり方に他ならない。

（5）個性記述学の影響

W.Windelband(1894)は経験的な諸科学を研究対象に基づき自然科学と精神科学とに区別するのは妥当でなく、研究方法によって法則定立的科学(nomothetic science)と個性記述的科学(idiographic science)とに区別すべきだと論じた。法則定立的科学は諸事実をそれらが服している一般的で法則的な関係性から説明しようとする。他方個性記述的科学は一つの独特な時間的に限定された実在の領域の内部に位置づけられた単一の多少なりとも広範な過程の完全で余すところのない記述を与えようとする。ヴァインデルバントは法則定立的科学の特徴を、①一般的法則の探究、②必然的な判断の確立、③不変の類的概念や形式の探究、④抽象への偏り、⑤永遠なものの真の描写とし、演繹の三段論法、すなわち大前提（法則）+小前提（条件）=結論（個々の出来事）を用いて、ある法則がある条件下である出来事を生じさせるという類の説明を行うとした。他方、個性記述的科学の特徴は、①特殊な歴史的諸事実の探究、②単一の断定的命題の確立、③個々の目的的發展としての実在の探究、④直観の重視、⑤出来事の真の描写とし、無限の因果関係、すなわち・・・条件（ある出来事）・・・結果（別の出来事）といった循環的論法を用いて個性的事実を記述する。そして、個性記述科学に固有の方法として、内挿法（書き加え）の原則、現実性の付与、精神の眼が挙げられる。内挿法とは観察された事実を批判し、仮説を構築するために書き加えが行われ、その中で諸事実と仮定が演じる役割を決定することである。現実性の付与とは過去の何らかの構造のなかに新しい生命を吹

き込みその全ての具体的で他と異なる諸特徴に理念的現実性や同時代性を与えることである。また精神の眼とは事実を直観的に捉えることである。この時、法則定立的科学としては自然科学を、個性記述的科学としては歴史学を主に念頭に置いていた。

IPAではイデオグラフィは個別のものを扱う学問という意味で用いられている。すなわち、個別とはまず細部に着目し、それ故に分析が深いという意味であり、次に特定の状況にある特定の人々の視点から特定の経験的現象（出来事、仮定、関係性）がどのように理解されているかという意味である。そのためにIPAは単一の事例研究や小規模の意図的に選ばれ分析的帰納の手続きに沿ったサンプリングに基づく複数の事例研究を行う。

IPAが法則定立的アプローチで一番問題視する点は、測定、集計、統計的推論の過程で個々人の全体性が消滅し発見は集団の平均値に関するものになってしまう点である。そのためそうした知見に当てはまる個人はどこにも存在しないといったことが起こる。IPAは単一の事例からより一般的陳述へと移行するための分析の方法（ステップ5とステップ6）を採用し、そこに含まれる個人についての個別の全体像を復元しうる形で一般化を図ろうとする。

イデオグラフィックな研究から理論的説明を導き出す方法には分析的帰納(analytic induction)と準司法的アプローチ(quasi-judicial approach)があるという。分析的帰納法はF. Znanieckiが最初に言及しその後GTにおいて用いられるようになった推論方法である。これはある現象に関わる諸事例のこれまでの研究から帰納された陳述（作業仮説）が新たな事例に当てはまらない場合当てはまるようにその陳述を修正するか、あるいはその現象を再定義して当てはまらない事例をその陳述の一般化から排除するか、して帰納的推論を続行する方法である。後者の場合には必然的にスノーボール・サンプリングと理論的飽和の考え方に結びつく。準司法的アプローチはD. Bromley (1985)が採用する方法である。まず単一の諸事例についての報告書をそれぞれ執筆し、それらを相互に比較して関係づけることで、諸事例に当てはまる法則性が次第に見いだされるという方法である。しかし、この方法では説明はごく限られた状況にある人々に限定され一般化のレベルは低くなる。

2. IPAのデータ収集

IPAは現象学、解釈学、個性記述学の考え方に基づき、個人の生きられた経験がどのようなものであるかを理解し、特定の現象（出来事や過程）とその人の関係や関わり方を明らかにしようとしている。そしてそれに適合的なデータの収集法やデータの分析法を採用する。しかし方法至上主義や方法崇拝に陥らないようにしなければならないと警告する。方法は二重の解釈という目的を達成するための緩やかな指針であって、分析の正否は研究者の想像力や柔軟で、創造的で、概念的な思考力にかかっているという。

多くの質的研究法（GT、ナラティブ心理学、談話心理学、言説心理学、現象学、IPAなど）の中からとくにIPAを選ぶ必然性は、どのようなリサーチ・クエスチョンを立てているにかかっている。IPAのリサーチ・クエスチョンの例としては、「拒食症の若者を診療するヘルスケアの専門家はどんな経験をして、それをどのように理解するのか？」(M. Jarman, J.A. Smith, & S. Walsh, 1997)とか「母親になる時に女性のアイデンティティの意味はどのように変化するのか？」(J.A. Smith, 1999)とか、「同性愛の男性は性や性交をどのように考えるのか？」(P. Flowers, J.A. Smith, P. Sheeran, & N. Beail, 1997)といったものがある。このように、IPAのリサーチ・クエスチョンは、特定の現象Xをトピックスにして、「Xという出来事・プロセスはどのように経験され意味づけられるのか？」といった形式をとっている。

IPAのサンプリングは、特定の経験をした人々が選ばれる方法を採用する。サーベイのように母集団から無作為に確率的に抽出するのではなく、同一の経験をして、それに対して同じ視点から意味を与えている当事者達を、スノーボール・サンプリングやゲートキーパーからの紹介によって調査対象者にする。対象者は母集団を代表しているのではなく、一つの視点を代表していなければならない。こうした意図的な等質的サンプリングを採用するのは、IPAが演繹的法則定立的論理で一般化を目指すのではなく、分析的帰納法の論理で個性記述的研究を蓄積してえられる理論の他の研究領域への移転可能性を目指すことの論理的帰結である。

IPA研究に適したデータ収集法は詳細な半構造化インタビュー、非構造化インタビューであり、そして場合によってはフォーカス・グループを用いるとされる。ここでは半構造化インタビュー法を中心にいくつかの留意点を見ていく。

(1) 半構造化インタビューとは何か

詳細なインタビュー（in-depth interview）は、話者が自分自身の経験談を自分の言葉で語ることを目的として、話者が語り聞き手が聞くという会話の形式で行われる。詳細なインタビューでは、リサーチ・クエスチョンに関連するいくつかのトピックスについて話者に語ってもらい、その後の分析によってリサーチ・クエスチョンに対する答えがえられるように仕組まれたインタビューである。

詳細なインタビューを実施するために、あらかじめ話者に語ってもらいたい項目を、話者が自分の体験談を語るのに適していると思われる順序に並べた質問項目票（インタビューの予定表）を準備しておくといよい。聞きたい話の論題を緩やかに定め、微妙な論点を見越しておいて、あらかじめ話者に聞く内容を知らせたり、自由回答式の質問文を考えておく。このようにトピックスはあらかじめ定めておくが、実際のインタビュー場面では話者の語り方や話の順序に応じて、予定していた質問順序を代えたり、質問を削除したり、新たに追加したりして柔軟にインタビューを実施する方法を半構造化インタビューと呼ぶ。インタビューの方法としてはナラティブ・インタビュー法やライフヒストリー・インタビューのように一人称の語りを引き出す方法と対話的インタビューのように二人称の語りを引き出す方法とがある（伊賀, 2010）。IPAは一人称の視点を三人称の視点と対比させて一人称の視点を採用するとしているが、トランスクリプトから判断する限り実際には対話的インタビューの方法に近いやりとりも見られる。

(2) 質問項目票

質問項目票の作成は話者が快適に自らの経験について詳しく語ることが出来るようにするためのものであるから、次の点に留意する必要がある。

- ① 質問は自由回答形式にする。
- ② 質問は限定ではなく包括的なものにする。
- ③ 聞き手が嘴を入れるのは最小限度にとどめる。

④ インタビューの中で出来事についての叙述やその経験談が語られている部分と、話者自身の分析や評価が語られている部分とがあるが、インタビューの初めの頃は叙述的に出来事やその経験が語られるような質問から入るとよい。話者がインタビューに慣れてきた頃合いを見計らって話者の分析や評価を求める質問をしていくと話者は話しやすい。

ここで①と②が特に重要である。話者の経験や関心について研究者があまりに多くのことを想定してしまうと誘導尋問になりかねない。たとえば、

「どんなお仕事をされていますか？」（叙述的回答を引き出す質問）「その仕事にはどのようにして就いたのですか？」（物語的な回答を引き出す質問）「仕事がうまくいかない時はどんな気分ですか？」（評価的な回答を引き出す質問）「他の仕事に就いていたらどんな生活になっていたと思いますか？」（比較する回答を引き出す質問）などは勧められるが、「あなたのお仕事は退屈だと思うんですが、どうですか？」とか「それじゃ、やり甲斐のある仕事だなんて言えないでしょうね？」などは避けなければならない質問である。

(3) 聞き取りの原則と留意点

IPA研究の目的は話者の経験とそれに対する意味づけを詳しく知ることであるから、聞き取りのスタイルは、聞き手は最小限のことしか言わず、話者が一方的に話すというものである。問題の経験に精通しているのは話者であるから、インタビューの最中には話者の話を注意深く聞き取り、理解することに集中し、話者の話に沿ってそれを深めるための質問をし、研究者の理論的関心や直観は括弧に入れなければならない、それらを話者の話と関連づけようとしたりしてはならない。この原則に従って、インタビュー実施上の留意点を挙げると次のようになる。

- ① インタビューを開始する前に話者との間にラポートを築く。
- ② インタビュー開始段階では話者が話すことになれるように、急がさず、なかなか言いにくそうにしているときには語りを促す質問をする。それ以外の要らぬ口出しは避ける。
- ③ 質問項目票は柔軟に活用し、話者が話したい話題を話者の話したい順序で話してもらう。聞き手の視点や関心を押しつけない。また誘導尋問にならないように気をつける。
- ④ 話者が話したことをもっと詳しく聞きたいときは、「それでどんな感じがしましたか？」とか「そこをもう少し詳しく話してください」といった促進的発言をする。よどみなく話が進んでいるときには、後でもっと詳しく聞きたい点をノートにとって、話が一段落したときに聞き直す。
- ⑤ 話者の自発的な語りは話者ごとで違うから、それに合わせて質問の順序や質問の言い回し方は話者ごとに変える。
- ⑥ 一つの質問に十分に答えきることができるように十分な時間をとる。
- ⑦ 一度に複数の質問をしない。話がこんがらかって、トランスクリプトを分析する段になってどの部分がどの質問に対応するのか分からなくなる。
- ⑧ 話者が沈黙したときには、しばらく様子を見る。再び話を始める場合があるからだ。話者が聞き手の話順である旨の発言や仕草をした場合には次の質問に移っていく。
- ⑨ 話者の話を注意深く傾聴することに心がけ、インタビューの最中に話者の話を解釈したりしない。また話者の話に照らして自分の理論や洞察を検証しようとしたりしない。
- ⑩ インタビューの最中の話者のノンバーバルな反応（とくに顔面表情）に気をつけ不安や不快の表情が見られたら微妙な論点を切り上げたり、質問の仕方を変えたり、場合によってはインタビューそれ自体を打ち切る必要がある。聞き手は倫理上の責任があることを忘れてはならない。
- ③ インタビュー直後にトランスクリプトを書いて、質問項目票と実際の進捗とを比較して次のインタビューのために質問項目票を書き換えたり、聞き取りの方略を練り直す。

(4) インタビューのリズム

インタビューの初めの方では話者とのラポートが十分に築けていないので、一般的で表面的で叙述的な話しか聞けないが、インタビューに慣れて熱が入ってくると、特殊で、暴露的で、感情的な話が出てくる。聞き手は話の中身に興奮したり感情的に反応せず、インタビューの潮目と見切って前の話題に戻って先に語らなかつたことを突っ込んで聞くチャンスとして捉える。

インタビューの初めの方では話者の話をもっと詳しく展開してもらうために、次のような促進的質問をする。

「・・・といわれましたが、それは何のことですか？」

「・・・といわれましたが、それは何故ですか？」

「・・・といわれましたが、もう少し詳しく話してくれませんか？」

「・・・といわれましたが、それをどう感じましたか？」

インタビューが進むにつれて、こうした促進的な質問は次第に不要となり、本人の個別的な経験やそれについての考え方や理解の仕方に絞って聞き取りを進めていく。包括的で一般的な話や、他人の言葉を借りた話は現象学的分析に向かない話なので、当人の言葉で当人の個別の経験とそれについての考え方や感じ方を語ってもらうようにインタビューを進める。

(5) 非構造化インタビューとフォーカス・グループ

経験を積んだIPA研究者は非構造化インタビューを用いることができる。これは、最初の中心的質問をして、その回答によってその後の質問が決められる。最初の中心的質問は、例えば、「あなたにとって糖尿病はどんな意味がありますか」といった質問である。この質問への回答の中で、話者はいくつかの関心事やトピックスを網羅的に語るであろう。それらについての体験談が一段落した後で、再び詳しく個別の出来事とそれらが話者に対してもつ意味、それらについての話者の考えや感情を語ってもらう。

フォーカス・グループは質的研究のデータ収集法としてよく選ばれるものの一つである。しかし、多くの

発言が飛び交い、やりとりが複雑になること、また直接的な評価や立場の鮮明化、そして三人称の語りが生じやすく、個人的な体験談はあまり出てこないことが多いので、談話分析には向くがIPAにはあまり向いていない。IPA研究でフォーカス・グループを用いる場合には次の点に注意しなければならない。

- ① フォーカス・グループが適したりサーチ・クエスションは直接的で実用的であるか、多数の話者の関心事を聞く必要がある場合である。
- ② フォーカス・グループを実行する場合は、トランスクリプトを集団のパターンや討議の進行の動態を記したものと、個性記述的な参加者の話について記したものと二種類のノートをつける。
- ③ 参加者に、質問に答えてもらうのか、予め決めてある議題について討議してもらうのか、準備した資料や草案を評価してもらうのか、実際上のジレンマを討議によって解決してもらうのかを決めておく。
- ④ 討議をコントロールする仕方を決めておく。
- ⑤ データをとる方法を決めておく。
- ⑥ 質問は自由回答で、全ての人にとってほぼ中立的な質問内容になるようにする。
- ⑦ 司会は討議の促進、監視、道理をわきまえた倫理的な討議環境の保全などを行う。
- ⑧ フォーカスグループのメンバー規模は4～5名が適当であり、助手がいる場合でもあと2～3名増やすのが限度である。

3. IPAのデータ分析

IPAのデータ分析は話者による経験の解釈を研究者が再解釈するために行われる。IPAのデータ分析の理論的根拠は「特定の文脈における個人的な理解に焦点を当てて話者の視点がどのようなものかを解釈する」ということであるが、そのプロセスは特定の個人的理解から人々に共有されている理解へ、また記述から解釈への移行として進められる。

2節のデータ収集のプロセスでは「当事者によって生かれた経験とそれに対して当事者が与えた意味」（第一の解釈）が明らかにされた。3節のデータ分析のプロセスでは、この第一の解釈を分析者が再解釈して第二の解釈がなされ、二重の解釈が完了する。分析の結果は話者と分析者との共同の作品といえるが、そこでの真理の主張は常に暫定的であり、この分析は主観的であると同時に対話的で体系的で厳密なものである。分析はトランスクリプトの読み直しと解釈のし直しとを繰り返す反復的なプロセスとして進められ、柔軟な思考、還元、拡張、修正、創造、刷新などが行われる。分析の中心であるトランスクリプトの読みは、テキストの断片の意味をテキスト全体の文脈に照らして捉える解釈学的循環である。次に、初心者向けの分析手順の指針を示そう。

(1) ステップ1 データの読みと読み直し

IPAの分析過程の第一段階は、もとのデータに没頭し、それをゆっくり繰り返し読みという作業からなっている。インタビューの録音のトランスクリプトがデータである場合、データを読みながら録音された音を聞くとデータの分析をより完全に行える。

ここでは、インタビューの構造が全体でどのようになっているのか、また特定の部分がつなぎ合わされてどのような物語が構成されているのかを読み取る。例えば色々な出来事が起こった順に述べられ、こうした話の中にそれら出来事の体験談が埋め込まれていて、これまでの人生の流れといった包括的な話から特定の出来事についての語りへと移行していることがある。

また、インタビューの中で話者との間でどのようにレポートが形成されていったのかを追うことで、どの部分の話が意味深長な話なのか、またどこに話の矛盾や逆説があるのかを把握する。IPAのインタビューでは最初は大まかな個人的な話がみられ、中頃に暴露話や心の葛藤を示す話がみられ、最後の頃に全体を要約したりまとめる話が出てくることが多い。

(2) ステップ2 ノートとり

ステップ1と同時にステップ2を行う。ステップ2はトランスクリプトの中で興味深い点を書き留めてい

く。話者の話の内容、特殊な言語使用（とりわけメタファー）、そしてそれらについての分析者の概念的解釈などを書き留める。GTと異なり、このノート付けのプロセスではトランスクリプトの行ごとのコーディングや意味単位ごとのコーディングは行わず、分析者の観点で自由なテキスト分析を行う。このノート付けには記述的コメント、言語学的コメント、そして概念的コメントの三種類のコメントがつけられる。コメントはトランスクリプトの右側の余白に書き込む。

- ① 話者にとって重要な事象（関係、過程、場所、出来事、価値、原理など主要な関心対象）と話者がそれらに与えた意味とを記述する記述的コメント。話者が用いた主要な語句あるいは説明を簡略に記録する。話者の話を額面通りに受け取って、話者の思考や経験を組み立てる事象が何なのかを際立たせ、それらの事象と話者との関係から話者の経験を記述する。例えば「車椅子」といった記述コメントになるかもしれないし、「支えられた自立を意味する車椅子」になるかもしれない。
- ② 話者の言語使用、代名詞の使用、発言の中断、笑い声、機能的相（時制など）、繰り返し、抑揚、メタファーの使用に着目した言語学的コメント。とくにメタファーは記述的コメントを概念的コメントに結びつける装置となる。例えばあるHIV陽性者が診断されたときの衝撃を「砲弾ショック」と比喻づけたのを取り上げてこれを言語学的コメントに流用した例などがその実例である。
- ③ 話者の話の中の意味パターンを理解する助けとなる分析者が用意した抽象的概念を註としてつける。この場合概念的コメントは疑問形の形で表記する。

実例としてP. Flowers, M.M. Davis, M. Larkin, S. Church, & C. Marriott(2011)のスコットランドのHIV陽性男性同性愛者のIPA研究でえられたトランスクリプト・データを取り上げてみよう。この研究は14人の話者にインタビューし、その分析から「アイデンティティ危機、喪失と疑念」、「HIVとの一体化と傷つけられたアイデンティティという感覚の体験」、「同化と調整」という三つのテーマを浮上させた。最初の「アイデンティティ危機、喪失と疑念」というテーマは、自分が何者であるのか分からなくなったという意識や、純潔性を失ったという感覚や、抗レトロウイルス治療によりHIVが慢性の処置可能な感染症になったという医療言説に対する疑い、についての様々な言及から浮上したテーマである。ここではアイデンティティ危機に関するある話者の体験談のトランスクリプトとそれにつけられた三種類のコメントからノート取りの実際を見てみよう。（表1を参照せよ）

〔トランスクリプト〕

聞き手：HIVだと分かったときのことをもっと話してくれませんか。

話者：もっとて、うーん。・・・そうだったかどうかは分からない、ふん・・・私は全く、全く誰だったか分からなかったからだ。・・・いろんな点でその時、診断を受けた当初は私がいったい何者なのか分からなくなった。

〔記述的コメント〕 自己を問う大問題。診断の衝撃。

〔言語学的コメント〕 説明しようともがいて「全く」を繰り返す。

〔概念的コメント〕 人は自分自身でないならば何者なのか？診断と自己を問うことがはっきりと結びついているのか？

こうしたコメントの付け方とは異なる方法でノート付けをしてもよい。例えば、トランスクリプトを読み進めながら重要だと思われる箇所に下線を引き、重要だと思った理由を余白に書き込む方法をとる場合もある。また、話者のテキストから自由連想法で、特定の文章や言葉から想起されたことを何であれ余白に書き込む方法をとる場合もある。

(3) ステップ3 浮上するテーマ

浮上するテーマを展開するステップ3では、トランスクリプトとノートとが分析対象になる。そしてノートの方により重点が置かれ、コメントの細部を縮約し、コメント間の相互関係や結びつき、そしてパターンを発見する。テーマとはトランスクリプトの小片に付されたフレーズであり、データに基づき、十分に個別

表 1. HIV 陽性者のトランスクリプトへのコメントとそれから浮上するテーマ

テーマ	トランスクリプト	コメント
自己を問うこと 自己喪失 時間的	聞き手：それについてもっと詳しく話してくれませんか ジャック：もってって、うーん。 ・・・そうだったか分からない、 うーん。・・・私は全く、全く 分からなかったからだ。・・・ いろんな点で。その当時、診察 を受けた頃、自分は一体何者な のか分からなくなった。	<u>口籠もらせているのは何か</u> <u>口に出そうともがいている。</u> <u>もがいて「全く」と繰り返す。</u> 自己を問うという大問題 <u>ジャックは何者か？自分自</u> <u>身でないなら何者か</u> <u>診断と自己を問う事を結びつ</u> <u>けるのか？ 診断の衝撃</u>
過程としての 対処 考えすぎ	次第にそれを受け入れるようにな っていった。それがいつも頭 にちらついて、うーん。・・・	<u>時間枠という決定的な感覚</u> <u>ステージとか羅りやすい時</u> <u>期といった観念か？</u> HIV について考える事で苦 しむ。
自己を発見する	私自身を発見する、いや再発見 するという手順を踏まざるをえ なかった、うーん。	<u>何が失われたかは分かるのか</u> <u>自己を見いだしたとして見い</u> <u>だしているのは何者か？</u> 診断の衝撃
手に負えない関 係性 自己をやりくり する作業	そばに私をよく知っている人た ちがいたけれど、本当に本当に大変 だった。えーと、彼らは口に出せ ないようだったけれど、何か変だ と気づいているのではと妄想し て HIV じゃない自分をイメージ してそれに近づこうと試みてい た。	彼を知る人々の重要性 <u>社会的重要性につて何を語っ</u> <u>ているのか？自己は社会的？</u> <u>「本当に」を繰り返して、大変</u> <u>だということを強調している。</u> <u>大変だということに気づく</u> <u>躊躇を示す繰り返し</u> <u>他人の見る目を気にするのは被</u> <u>害妄想か？</u> <u>昔の自己は正常か？演技という</u> <u>感覚 本当の自己喪失の暗示？</u>
演技としての自 己 診断が自己を 変容させる 昔の自己を守る ための否認		

的で、かつ概念的な抽象性を備えた心理学的本質を表現するフレーズでなければならない。テーマはトランスクリプトの左側の余白に書き込む。

IPAは話者の解釈を分析者が再解釈する二重の解釈を行う訳だが、このステップ3は分析者の再解釈が行われ始める段階と言える。このように、テーマは話者のもとの言葉や考え方だけでなく、分析者の解釈を反映した、いわば現象学的記述と解釈学的解釈の相乗的プロセスといえる。

先に取り上げたHIV陽性者のトランスクリプトについて最初に浮上したテーマは「自己を問うこと」である。これはジャック（話者の仮名）がもがき苦しみながら診断を受け入れたということをはっきりと口に出せないことについての記述的コメントや「全く分からないと言っている」という言語学的コメントを捉え、また「自己」という心理学的構成概念による分析者の理解を反映している。

(4) ステップ4 浮上した諸テーマ間の結合関係の発見

この段階では諸テーマ間の結びつきを発見し、諸テーマを配置して、それらの間の結合関係を表示した図を作成する。この段階では、ステップ3で浮上した全てのテーマが用いられるのではなく、リサーチ・クエストに照らして関連性のあるテーマを絞り込む。テーマ間の結合関係を探し出すための方法は大きく言って二つある。

- ① すべてのテーマを語られた順に書き込んだリストを作る。そのリスト上の諸テーマを注意深く見渡しなが、関連するテーマをまとめていく。テーマの中には磁石のように他のテーマを引き寄せるものがある。それを中心にして引き寄せられた諸テーマを群塊化していく。
- ② プリントアウトしたテーマ表を各テーマごとに切断し、大きな空間（床とか、掲示板など）を利用して、それぞれのテーマが一つずつ記載された各紙片をあちこちに移動させながら配置してみる。類似した理解を表すテーマを同じ所にまとめ、相互に対立するテーマ群は離して配置する。
この二つ以外にもいくつかの補助的・併用的な方法がある。
- ③ 似たもの同士のテーマを並べ、その群塊に新しい名称をつける。たとえば、ジャックのトランスクリプトの抜粋例では、「診断の衝撃」という記述コメントの回りに浮上した「考えすぎ」、「悲嘆」、「抑鬱」、「ショック」、「自尊心の喪失」、などのテーマが一つのクラスターに纏められて「HIV診断の心理学的影響」という名称の上位テーマとして抽象される。
- ④ 浮上したテーマそれ自体に関連する諸テーマを一括する上位テーマとして用いる。たとえば、「自己変容としての診断」という浮上したテーマが「自己喪失」、「悲嘆」、「自己を問うこと」、「演技としての自己」、「自己をやりくりする作業」、「昔の自己を守るための否認」、「診断と今の自己を現実のものとして受け入れる開示」、「予測された自己の喪失」などの諸テーマが包摂される。
- ⑤ テーマ間の差異に着目し、対極的な諸テーマを群塊化する。たとえば、「HIV診断による自己変容」の否定的側面と対比される「自己の再肯定」、「持続的自己」、「自己の再建」、「よりよい人間になること」、「十全に生きることを学ぶ」などの肯定的なテーマをひとまとめにする。
- ⑥ 浮上した諸テーマをそれらが話者の語りの中で位置づけられた時点に沿って配置し編集する方法もある。たとえば、ジャックのHIVについての語りでは、「診断の瞬間」、「感染時の回想」、「はじめて友人に自分の状態を開示」、「支援グループへの初めての訪問」、「HIV陽性者としての初めての性交」、「家族への開示」という順で諸テーマを配列して結びつける。
- ⑦ 話者にとってのある経験の一連の意味を分かりやすいものにするテーマが一度しか語られないこともある。たとえば、ジャックの「砲弾ショック」がその例である。しかし、一般的には浮上したテーマが現れる頻度は、話者にとってのその相対的重要性やレリヴァンスの指標になりうる。こうしたテーマは上位テーマを設定する時の磁石（連結作用概念）となりうる。
- ⑧ 浮上した諸テーマはトランスクリプト内のそれらの特殊な言語学上の機能から検討することもできる。たとえば、肯定的な表現と否定的な表現によってテーマの編集を行うことで意味の交錯が明らかになるが、それは話者が話者の意味で呈示したことを超えて解釈されることがあり得る。たとえば、診断後の自己変容の否定的側面はジャックを環境の「犠牲者」として位置づけるようにも見えようが、「自己の再肯定」と結びつけられた肯定的な諸テーマは彼を物語内の「生存者」あるいは「ヒーロー」とし

て位置づける手段だと考えることも出来る。このような言語使用の機能により関連するテーマを一括りにして上位テーマを設定することもできる。

これらの諸方法は相互に排他的なものではなく、いくつかを同時に用いることができる。

(5) 次の事例の分析

IPA研究では通常複数の事例を分析するので、最初の実例をステップ4まで実行したら、二番目の事例に取りかかる。研究者の前構造は第一の実例の分析で既に変化しているので、第二の実例の分析では第一の実例の分析で浮かんだアイデアから影響を受けることは避けられない。しかしIPAの原則は、それぞれの事例をそこで言われている通りに扱い、それらの個別性を正当に扱うということである。そこで、前の事例の分析で浮かんだアイデアを括弧に入れて、ステップ1～4を実行することで、各事例ごとにそのトランスクリプトに基づいたテーマの浮上を試みなければならない。

(6) 通事例的パターンの発見

ステップ5で全ての事例の分析が終了すれば、いよいよ理論的視点から通時的パターンを発見する段階に入る。ステップ6では、ある事例で分析されたテーマ結合が別の事例を理解するのにどれくらい役立つかを検討する。すなわち、諸事例で分析されたテーマ結合の表を相互に見比べ、それらの中で最も卓越したテーマは何か、また事例横断的に共通してみられるテーマ結合は何かを発見する。この際に、各事例のテーマ内のサブテーマの配置変えや上位テーマの名称の変更なども行われる。こうして、全ての事例を基にした新たなテーマ表が構成され、研究者の理論的諸概念によってそれらのテーマが解釈され、テーマ間の関係についての理論的命題が引き出される。

4. IPAの執筆

IPAでは決められた執筆順序があるわけではないが、分析が終了した段階で直ちに分析結果の説を執筆することが勧められている。というのも執筆のプロセスでも分析が続けられ、諸テーマについての解釈が深められていくので、分析結果の節の草稿を何度も推敲しながら、書き直しつつ、分析を深めることができるからである。

(1) 分析結果の節

分析結果の節でしなければならないことは、

- ① 第一に、データを解説し、それらがどのようなものか読者に知らせることである。そのために、話者の話の抜粋が長々と引用される。
- ② 第二に、データについての解釈を加え、データ全体が意味することは何なのかについての著者の主張の正しさを証拠に基づいて述べることである。このためにテキストの分析的解釈が詳細に加えられる。分析結果の書き方で留意すべき点は以下の通りである。
- ① 読者が最初のテーマを読み始める前におおまかに全体を捉えられるように、分析によって分かった事をテーマリストのような形で要約しておく。
- ② テーマごとに編集をする場合は、上位テーマを論理的つながりに沿って取り上げ、各テーマを支持する証拠としてトランスクリプトの抜粋を示す。読者ごとに編集をする場合は、話者ごとに当てはまるテーマを取り上げ、そのそれぞれを支持する抜粋で証拠立てていく。
- ③ 各テーマには明確かつ十分な叙述的解釈を加えるとともに、話者のトランスクリプトからの抜粋で証拠立てる。
- ④ 執筆中に各テーマの重要性の認識が変化してより多くの分析を加えなければならないものが出てくる可能性がある。そこで、分析結果全体をすばやく執筆してから、各テーマに戻って推敲していくのがよい。
- ⑤ 初心者の場合、第一草稿では記述的すぎて、トランスクリプトからの引用文が多すぎることもある。

そこで第二稿ではより解釈的な研究者の主張が多く述べられた文章に変えていくとよい。

(2) その他の節の執筆

分析結果の節を一通り書き終えたら、次に表題、要約、序、方法の節、論考の節を執筆する。いずれにせよ各節は何度も書き直すことが重要である。執筆のプロセスでは話者の話（トランスクリプト）や先行研究のテキストとの対話が反復的に続けられて、著者の解釈すなわち著者の声が固まっていくのだ。

表題は読者の注意を惹きつける一方で研究プロジェクトについての情報を与えるものでなければならない。そこで、たとえば、孤独についてのIPA研究であれば、「孤独とは何か：解釈的現象学的分析」といったものになる。

要約は簡明に論文の内容を要約したものだが、次のことが含まれていなければならない。

- ① リサーチ・クエスチョンを定義し、それがなぜ重要かを述べる。
- ② 一般的な主題を呈示する。
- ③ サンプルについて記述する。
- ④ データ収集法や分析方法を概説し、何故それらの方法を用いたのかを説明する。
- ⑤ 分かったことを要約する。
- ⑥ それが何を意味すると考えられるのか、またそれが他の研究や実践に対してどのように関係するのかを説明する。

序では、何についてのプロジェクトであるのか、それがなぜ重要なかを述べる。さらに、先行研究を簡明にまた批判的に言及し、その研究分野の現状を素描する。さらに本研究が扱おうとしている特定の問題を確認する。またなぜIPAを用いて研究するのか、IPAがなぜ適しているのかを述べる。そしてリサーチ・クエスチョンを概説して序を閉じる。

方法の節では、次の事柄が書かれていなければならない。

- ① どのようにして話者を選び、どのように接触したのか、また聞き取りにあたってどのような情報を話者に与えたのかを概説する。
- ② 話者について記述する。
- ③ 聞き取りの質問項目票をどのようにして開発したのかを説明する。また質問項目票を呈示する（付録にしてもよい）。
- ④ 聞き取りのプロセス、インタビュー技法、データの記録と書写の方法を述べる。
- ⑤ 分析の流れを説明する。

論考の節では、広い文脈の中で本研究の位置づけを行う。発見されたことが、先行研究を支持するものなのか、それとも問題視したり否定するものなのかを述べる。とくに、分析の中で予期せぬ発見があった場合には、これまでのその領域での通説を覆す可能性がある。膨大な先行研究を渉猟し、発見したことにとくに関連性があるものについて論評を加える。さらに論考の節では自身の研究の評価を加えなければならない。この研究から何が学べたのか、長所と欠点は何か、今後どのように展開しうするのか、実践に対してどのような意義があるのかなどについて述べる。

5. IPAの科学性を巡る論争

(1) 科学性の基準

社会学や人類学と異なり、心理学の分野では未だに実証主義が主流派を構成している。そのために、IPAを含め質的方法論に対しては非科学的であるという烙印が押され続けている。

科学(science)の語源はラテン語のscientiaすなわちknowledgeであり、科学とは知識と言うことになる。この意味では自然科学と同様に社会科学もはたまた人文学や歴史学でさえ科学と言うことになる。しかし、実証主義の視点からは科学と言うからには、経験的事実に基づく法則の探究と法則による経験的事実の説明、

法則の反証可能性、といった要件を満たすべきだと言われている。しかし、法則の探究については、その際に枚挙の帰納法にせよ仮説演繹法にせよ帰納的推論を用いるので全称命題としての法則は導き出しえないというヒューム以来の批判がある。また反証性について言うと、ラカトシュのリサーチ・プログラム論のようにハードコア（基本仮説）に対する反証例が現れても補助化説が追加されたり修正されることでハードコアは守り通されるという説や、デュエム・クワインターゼのように理論を全体として否定しうる決定的実験というものは存在し得ないなど、反証可能性の要件は自然科学の実際に即していないという批判もある。ここでは次の四つを科学の要件として考えてみよう。①経験的十全性（観察可能な水準で経験と矛盾しない理論を組み立てている。すなわち、確実な証拠を得それと矛盾しない理論を正しい推論に基づいて組み立てている。そのためその理論によって経験的事実を説明できる。）、②操作性（諸現象を諸要因に分解し、一つの要因以外の要因を統制し、その一つの要因のみを変化させた時に、仮説通り別のある要因が変化することを確かめられる。）、③反証可能性（実験、観察、分析の手続きが明確に述べられていて、反証するための操作を実行しうる。）、④再現可能性（同じ操作を何回繰り返しても、また誰がその操作をやっても同じ結果が得られる）の四つである。IPAのみならず社会科学や行動科学でも一般に②や④は満たしていない。①と③はIPAでも満たしていると考えられる。ジョルジの批判とスミスの反論はこれらの点に関わっている。

(2) ジョルジのスミス批判：IPAは科学でも現象学でもない

ジョルジ(A.Giorgi,2010;2011)はIPAが科学の基本的要件を満たしていないと批判する。批判の概要は次のようなことである。科学的知識は客観的でなければならない。ある研究者だけが正しいと思っているのではなく、多くに研究者が正しいと思う必要がある。そして、得られる知識はどのような方法を採用したかによって決まるのであるから、方法は間主観的（客観的）、すなわち多くの研究者が共有し、再現しうるものでなければならない。しかるにIPAにはそのような規定的方法がないというのだ。

ジョルジによれば、スミスらはIPAには単一の決定的な方法というものはなく、IPAを用いたいと思う研究者達は自分自身のやり方や研究している分野の特殊性にあわせてスミスらが開発した方法を改変しながら用いればよいと言っているとする。また、質的分析というのは不可避免的に個人的（主観的personal）なプロセスであって、分析それ自体研究者が各ステップで行う解釈作業のことであると述べているとする。そして、分析のステップ2で行うコメント付けは、自由なテキスト分析であって、テキストを意味単位に分割して各単位に必ずコメントをつける必要はなく、思い付いた箇所に思い付いたコメントをつければよいという。そのコメントは要約や言い替えであっても、連想したことであっても、仮の解釈であってもよいと言っているとする。

ジョルジの批判はとりわけこの方法の非規定性に向けられている。ジョルジは人間科学を含めておよそ科学であるならば、すべての方法は間主観的（客観的intersubjective）でなければならないので、非規定的方法というのは撞着であるとする。なぜなら、科学における研究成果は用いた方法に関連しているので、研究結果を点検したり、その研究を再現できないやり方で得られた研究結果は、その個人しか妥当だと思えない成果にすぎないからだ。研究結果の客観性はその方法の間主観性（同じ方法を共有し、その方法で同じ研究結果が得られるか否かを点検するために研究プロセスを再現できること）に依存しているのだと主張している。

そして、おそらくスミスらは彼らの用いたデータ収集方法やデータ分析方法は一定の標準であり、役立つからこれに倣えばよいと思いつつ、ある程度柔軟に必要なに応じて修正して用いてよいという、二つの矛盾した方法のいいとこ取りを狙っているものと思われるが、およそ科学であるからには、許容される自由度を明確に述べておかないと、修正は留まるところを知らず全く別の方法にたどり着く場合がでてくることは想像に難くないという。だから柔軟な方法を開発するなら、可能な修正の範囲と受け入れられる方法を支える論理を銘記し、逸脱が大きすぎてその方法の趣旨に反してしまう事例とその場合にどの論理が違背されたのかを示すべきだという。

ジョルジが一番問題にしているのは、分析ステップ2のノート付けのところで、何にコメントをつけるのかについてはルールがなく、また全てのデータにコメントをつけなければならないと指示していない点である。たとえばJ.A. Smith & M. Osborn(2003)のP.67の引用文中の話者の「私はまったく嫌になっちゃう」（表

表2. 腰痛患者の自己嫌悪表現につけられたテーマ

研究者がつけたテーマ	話者の表現
「私という人間」対「いい人」 あなたが気づいているなら恥ずかしい —嫌悪感 知られているという恐れ	あなたが言うように自分を表現すべきなら 私はいい人ね。でも違う、私には別の面がある。 あなたは気づいているのだろうけど口しない。 あなたに嫌われるわよね。ああ嫌になっちゃう。

2)に対応したテーマが示されておらず、p.73のテーマ群の表にも「嫌気持ち」(hatefulness)が含まれていないがこれは心理学的に重要なテーマではないのかと批判している。そして科学者ならば蒐集されたデータ全てを考慮した分析をしなければならないと批判する。このようにデータの中から特定の部分のみを選択してコメント付けし、どのような基準でそのような選択をしたのかが明記されていないので、研究者の選択した視点による偏りが生じ、間主観性(客観性)の原理に反しているというのだ。たとえば、先の例で、「私という人間」対「いい人」というテーマは話者の表現のどこまでを指して言っているのか?2行目までのところか、それともパラグラフ全体なのか?また、このコメントはこの部分の表現を適切に捉えているといえるのか?ここでの話者は「本当はいい人でない自分」対「うわべはいい人に見える人物」という対比に基づいているのではなく、「人前ではいい人」と「自身から見るといい人ではない自分」という対比でなされていると考えられるのではないかと述べている。

また、つけるコメントが①要約や言い換え、②連想や連関、③予備的解釈のいずれでもよいとする無定型さを批判して、それではコメントと言ってもデータを反映したものと、単に研究者が自ら学んだ学問から教え込まれてきたことにすぎないものと両方が無反省的・無自覚的に混入してしまう事を危惧している。こうした方法は科学的でも現象学的でもないというのだ。

以上のようにジョルジはIPAの最大の欠陥は分析手順を導くためのルールが与えられておらず、研究者は自由なテキスト分析を実行せざるを得ず、間主観的な結論を得ることができないということだ。だからこの方法を支配しているのは個人的視点であって、IPAはまさに「個人主義的な経験分析」(IEA)と呼ぶのがふさわしいとまで言っている。

(3) スミスの反論：IPAは現象学と解釈学に基づいた経験分析の科学である

ジョルジの批判に対してスミスの述べた反論の要旨は次のようなものである。

- ① ジョルジがIPA批判に用いた論考は学生向けに書かれた教科書であり、IPAの主要著作(J.A. Smith et al., 2009)に触れていないにもかかわらず、IPA全体の批判をしている。スミスらは主著の中で(J.A. Smith et al., 2009)詳細に現象学や解釈学の主要な論者の主張を綿密に検討して、その主要な共通の論点を踏まえた認識論を展開し、それに則った方法論がIPAにほかならない。
- ② ジョルジはIPAの方法論は本当は規定的のものではないかと訝っているが、IPAの方法論は量的方法のように手順がきっちりと規定されているのとは異なって、規定的(指示的)ではない。IPAが成功するか否かは、インタビュー、分析、解釈、執筆といった複雑な技術に研究者が熟達しうるか否かにかかっている。手続きを事細かに規定したからといって研究がうまくいくとは限らない。だから、研究者の技量、研究目的、対象者の状況などを考慮して手続きを柔軟に改変して用いればよいというのが我々の趣旨である。しかし、ジョルジが言うように標準的手続きからの逸脱の完全な自由を与えているわけではない。実行しなければならない研究ステップは決まっていてその順序も決まっている。しかし、各ステップをどのように行うかについては柔軟性があるということだ。
- ③ ジョルジは再現可能性がないと主張しているが、その際に点検と再現性を混同している。ジョルジはIPAの方法的柔軟性では分析が再現できないとしているが、再現性はデータ収集段階の論点であり、質的

研究では対象者が同じ人物であっても別の研究者がインタビューを繰り返したところで、最初の研究者がやったのと同じインタビューにはならないという意味で再現性はあり得ない。だから、質的心理学の大半は再現可能性を科学に必要な要件とはみなしていない。再現可能性は人間科学ではほとんど満ち得ぬ基準であり、むしろ質的研究を評価する基準としては①文脈への感受性、②研究対象への没頭、研究の厳密さ、研究プロセスや手続きの透明性、③研究成果の実践や臨床への有用性・重要性などを考えるべきだ (L.Yardley,2000)。また、ジョルジのいう分析の再現性は点検可能性というべきだが、IPAでは別の研究者によって繰り返し行うことが可能であり、それに基づいて最初の研究者の分析を正すことも可能だ。

- ④ ジョルジが分析の再現性の欠如の例として取り上げたデータの「自己嫌悪」についての引用例で、ジョルジが論文をよく読んでいないことを示す誤りがあるとしていくつかの点を指摘する。まず「研究者のテーマ」と書いてあるのは、「コメント」でなければならない。また、この話者は女性で仮名がつけられているがジョルジは読み落として男性と誤解している。さらに「自己嫌悪」については執筆のところではっきりと明記している。このようにジョルジの批判はいい加減な読みに基づいたいい加減な批判である。

(4) 結 論

以上のIPAの科学性を巡る論争は若干かみ合っていないところがある。まず、ジョルジはフッサールの現象学をいかにして科学としての心理学に反映するかという問題意識から科学の要件を考えており、スミスらは解釈学の伝統に則って人文科学の科学性はいかにあるべきかという問題意識を持っている。前者は客観性を間主観性として捉え、後者は解釈の主観性をむしろ堅持しようとする。IPAは人間生活における経験の意味の解明にこそその意義があるのであるから、それ自体の権利で自らの特徴を生かしていくことにこそその存在意義があると言えよう。だからジョルジの批判をIPAはそのまま受け入れる必要はない。

方法的柔軟さがもたらす最大の問題点はむしろ二重の解釈過程を巡る曖昧さの中にある。二重の解釈過程とは一人称の話者の経験の自己解釈を三人称の研究者が再解釈することである。そうであるならば、データ収集の方法としては非構造化インタビューか自伝・日記の蒐集しかあり得ない。半構造化インタビュー法は明らかに対話的インタビューであり、こうしたインタビューの中では意味が相互作用的に構成されていく。つまり、そこで得られたデータは一人称のデータではなく二人称の共同主観的データとなるからである。ジョルジが批判したスミスらの論文 (V.Eatough & J.A.Smith,2008:187)でも「データ収集は話者との対話として進められ、話者が何を話すかを決めるのに重要な役割を果たす」と述べているが、そもそも半構造化インタビューではインタビューの予定表の質問項目が研究者によって決められ対話の中で話者の取り上げた用語や隠喩をさらなる話題として取り上げるというやり方をとるので、話題の設定も二人称の観点で共同主観的に行われると言えるのだ。しかし、二人称の対話的方法是IPAの二重の解釈過程の方法とは相容れない存在論及び認識論に基づいている。

Larkin et al. (2011)はIPAが認知科学の新しい世代の展開に貢献しようと述べているがそこで一括して「身体的で活動的で状況づけられた認知のパラダイム」とされたものの中に含まれた「他者の現象学」と「現象学的な心の哲学」とは存在論や認識論のレベルで異なる立場に立っておりこれらを同じ思想的運動と考えることはできない。他者の現象学 (heterophenomenology: Dennett D.C.,1991, 2003, 2007)は一人称のデータを三人称の視点で再解釈するのであるが、それは決して対話による関係性の構築と二人称の視点による生きられた経験という現実の構成のプロセスとは同じではない。ギャラガーやザハヴィやバレラは認知を自覚的で間主観的な意味形成のプロセスとして捉えているのだ。確かに、Larkin et al. (2011)が言うように、認知科学の新しい世代は結合主義的なコンピューターモデルのパラダイムから身体的で活動的で状況づけられた認知のパラダイムへと転回しているかも知れないが、ライルやデネットらの分析哲学の系譜とギャラガーやザハヴィやバレラらの現象学の系譜では存在論も認識論も全く異なっている。前者が三人称の視点を後者が二人称の視点をそれぞれ重視している事を見逃す事が、IPAの方法論的柔軟さのもたらす最大の問題点であるといえる (S. Kvale, 1983, 2009; H.R. Pollio, et al., 2006; S. Gallagher, & F. Varela, 2001; S. Gallagher, & D. Zahavi, 2007; F.J. Varela & J. Shear, 1999; F.J. Varela, 1996; Z. Zahavi,2007)。現象学的な心の哲学が想定する自己は「語りにより構築される自己」である。そして「一次的相互主観性」(新生児の「模倣」や「ジェス

チャー・表現の協調」などに見られる),「二次的相互主観性」(共同注意に基づく目的志向的振る舞い)さらに「共有された物語による自己語りという相互主観性」が他者に対する二人称の接近を可能にしているのだ。一人称の視点+三人称の視点の方法論は二人称の視点の方法論と同じではない。一人称の視点+三人称の視点の方法論では当事者の経験談を科学者が理論的な眼で再解釈するということであり,その際に当事者(や患者)と科学者(や医者)とが共通のリアリティを構築することはない。二人称の視点とは,当事者の家族や親友や同志が長い付き合いの中で様々な経験を共有し,そのなかで遭遇した事物や人や出来事を色々なカテゴリーに分類し,それらを自分たちのこれまでの経験流や未来への投企に照らして意味づけ,それらに特定の感情を抱き,共通の意欲をもつ場合のように,リアリティを共同構築する間主観性のことである。インタビューアが話者とそのような関係に入るには単なる一時的なラポートの構築に止まらず,長い期間の相互作用と一体感や共通の目的意識の醸成とが不可欠である。

参考文献

- Addison, R.B., 1989, "Grounded Interpretive Research: An Investigation of Physician Socialization" in M. J. Packer & R. B. Addison, (eds.) *Entering the Circle*, State University of New York, Albany, N.Y., 39-57.
- , 1999, "Grounded Hermeneutic Editing Approach", in B. F. Crabtree & W. L. Miller (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks, California, 145-161.
- Benner, P., (eds.) 1994, *Interpretive Phenomenology—Embodiment, Caring, and Ethics in Health and Illness*, Sage, London.
- Biggerstaff, D., 2012, "Qualitative Research Methods in Psychology," in G. Rossi (eds.), *Psychology: selected papers*, Rijeka: Tech, 175-206
- Birus, H., 1986, *Hermeneutische Positionen*, Gottingen: Vandenhoeck & Ruprecht. 竹田・三国・横山 訳, 1987, 「解釈学とは何か」 山本書店
- Blattner, W.D., 1994, "Is Heidegger a Kantian Idealist?", *Inquiry*, 37:185-201
- Blumer, H., 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice Hall, Inc. 後藤将之訳「シンボリック相互作用論: パースペクティヴと方法」, 勁草書房 1991
- Bollnow, O.F., 1949, *Das Aufsätze zur Theorie der Geisteswissenschaften*, Mainz: Kirchheim Verlag. 小笠原道雄・田代尚弘訳, 1978, 「理解するということ」 以文社
- Boyatzis, R.E., 1973, *Alcohol and aggression: A study of the interaction*. Unpublished final report on Contract No. HMS-42-72-178, submitted to the National Institute of Alcohol Abuse and Alcoholism. Rockvill, MD.
- , 1974, "The effect of alcohol consumption on the aggressive behavior of men", *Quarterly Journal of Studies on Alcohol*, 35:959-972.
- , 1975, "The predisposition toward alcohol-related interpersonal aggression in men", *Journal of Studies on Alcohol*, 36:1196-1207.
- , 1983, "Who should drink what, when, and where if looking for a fight", in E. Gottheil, K. A. Druley, T. E. Skoloda, & H. M. Waxman (eds.) *Alcohol, drug abuse and aggression*. Springfield, IL: Charles C Thomas, 314-329.
- , 1998, *Transforming Qualitative Information*, Sage Thousand Oaks, California.
- Bromley, D., 1985, The case-study method as a basic approach to personality. Paper given to BPS London Conference.
- Cerbone, D. R., 1995, "World, World-entry, and Realism in Early Heidegger", *Inquiry*, 38:401-421
- Clarke, A.E., 2003, "Situational Analyses: Grounded Theory Mapping After the Postmodern Turn", *Symbolic Interaction*, 26(4):553-576.
- Chalmers, D.J., 2004, *How Can We Construct a Science of Consciousness?* in M. Gazzaniga, (eds.) *The Cognitive Neurosciences III*. MIT Press,
- Charmaz, K., 1995, "Between Positivism and Postmodernism: Implications for Methods," *Studies in Symbolic Interaction*, 17:43-72.

- Charmaz, K., 2000, in N.K. Denzin, & Y.S. Lincoln, *Handbook of Qualitative Research, second edition*, Thousand Oaks, Sage Publications. 藤原顕訳「質的ハンドブック2巻：質的研究の設計と戦略」北大路書房
- Charmaz, K., 2006, *Constructing Grounded Theory: A Practical Guide Through Qualitative Analysis*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.
- Crabtree, B.F., & W.L. Miller, 1999, "Using Codes and Code Manuals: A template organizing style of interpretation", in B.F. Crabtree & W.L. Miller (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks, California, 163-177.
- Crotty, M., 1996, *Phenomenology and Nursing Research*. Churchill Livingstone, Melbourne.
- , 2003, *The Foundations of Social Research*, Sage, London.
- Dennett, D.C., 1991, *Consciousness Explained*. Boston: Little Brown. 山口泰司訳「解明される意識」青土社, 1998
- , 2003, "Who's on First?: Heterophenomenology Explained," *Journal of Consciousness Studies*, 10(9-10):19-30.
- , 2007, "Heterophenomenology Reconsidered," *Phenomenology and the Cognitive Sciences* 6(1-2):247-270.
- Dey, I., 1999, *Grounding Grounded Theory*. San Diego: Academic Press.
- Dilthey, W., 1914, *Gesammelte Schriften*, Bd., Stuttgart, 山本英一・上田武訳1981, 「精神科学 序説：社会と歴史の研究にたいする一つの基礎づけの試み」以文社
- , 1946, *Die Philosophie des Lebens. Eine Auswahl aus seinen Schriften 1867-1910*, hrsg. von Herman Nohl. Vittorio Klostermann, 久野昭監訳「生の哲学」, 1987, 以文社
- , 1957, *Gesammelte Schriften*, Bd., Stuttgart, 317-331, 久野昭訳, 1973, 「解釈学の成立」以文社
- Douglass, B.G., & C. Moustakas, 1985, "Heuristic Inquiry: The internal search to know", *Journal of Humanistic Psychology*, 25(3):39-55.
- Dowling, M., 2007, "From Husserl to van Manen, A Review of Different Phenomenological Approaches" *International Journal of Nursing Studies*, 44:131-142.
- Dreyfus, H.L., 1991, *Being-in-the-World: A Commentary on Heidegger's Being and Time*, Cambridge, MA., Massachusetts Institute of Technology. 門脇監訳「世界内存在—『存在と時間』における日常性の解釈学」産業図書。
- , 2002, "How Heidegger Defends the Possibility of a Correspondence Theory of Truth with respect to the Entities of Natural Science", in Dreyfus, H.L., & M.A. Wrathall (eds.), *Heidegger Reexamined*, London, Routledge, 219-230.
- Dreyfus, H.L., & C. Spinosa, 2002, "Coping with Thing-in-itself: A Practice-Based Phenomenological Argument for Realism", in Dreyfus, H.L., & M.A. Wrathall (eds.), *Heidegger Reexamined*, London, Routledge, 249-278
- Eatough, V., & J.A. Smith, 2008, "Interpretative Phenomenological Analysis," in C. Willig & W. Staanton-Rogers (eds.), *The Sage Handbook of Qualitative Research in Psychology*. London: Sage
- Feredy, J., & E. Muir-Cochrane, 2006, "Demonstrating Rigor Using Thematic Analysis: A Hybrid Approach of Inductive and Deductive Coding and Theme Development", *IJQM*, 5(1):1-10.
- Flick, U., 1995, *Qualitative Forschung*, Hamburg, Rowohlt Taschenbuch Verlag. 小田博志他訳「質的研究入門」, 2002, 春秋社
- Flowers, P., J.A. Smith, P. Sheeran, & N. Beail, 1997, "Health and romance: Understanding unprotected sex in relationships between gay men," *British Journal of Health Psychology*, 2:73-86.
- Flowers, P., M.M. Davis, M. Larkin, S. Church, & C. Marriott, 2011, "Understanding the impact of HIV diagnosis amongst gay men in Scotland: An interpretative phenomenological analysis," *Psychology and Health*, 26(10):1378-1391.
- Gadamer, H.G., 1975, *Wahrheit und Methode Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, J.C.B. Mohr, Tübingen. 轡田収・卷田悦郎他, 1986, 2008, 「真理と方法」法政大学出版会
- Gallagher, S., & F. Varela, 2001, "Redrawing the map and resetting the time: Phenomenology and the cognitive science," in S. Crowell, L. Embree, & S.J. Julian (eds.) *The reach of reflection: Issues for phenomenology's*

second century. Electronpress.com

- Gallagher, S., & D. Zahavi, 2007, *The phenomenological mind: An introduction to philosophy of mind and cognitive science*. London: Routledge. 石原他訳「現象学的な心」勁草書房, 2011
- Giorgi, A., 1970, *Duquwsne Studies in Phenomenological Psychology: Volume*, Duquesne University Press. Pittsburg, PA. 早坂泰次郎監訳「心理学の転換」勁草書房, 1985.
- , 1976, *Phenomenology and the Foundation of Psychology*, Duquesne University Press. Pittsburg, PA. 早坂泰次郎監訳「心理学の転換」勁草書房, 1985.
- , 1985, "Sketch of a Psychological Phenomenological Method", in A. Giorgi (eds.) *Phenomenology and Psychological Research*, Duquesne University Press. Pittsburg, PA.
- , 1992, "Description versus Interpretation : Competing Alternative Strategies for Qualitative Research", *Journal of Phenomenological Psychology*, 23(2):119-135
- , 1997, "The Theory , Practice , and Evaluation of the Phenomenological Method as a Qualitative Research Procedure", *Journal of Phenomenological Psychology*, 28(2): 236-260.
- , 1999, "A Phenomenological Perspective on Some Phenomenographic Results on Learning", *Journal of Phenomenological Psychology*, 30(2):68-93.
- , 2000a, "The status of Husserlian phenomenology in caring research", *Scandinavian Journal of Caring Science*, 14:3-10.
- , 2000b, "Concerning the application of phenomenology to caring research" *Scandinavian Journal of Caring Science*, 14:11-15.
- , 2002, "The Question of Validity in Qualitative Research", *Journal of Phenomenological Psychology*, 33(1):1-18.
- , 2004, "A Way to Overcome the Methodological Vicissitudes Involved in Researching Subjectivity", *Journal of Phenomenological Psychology*, 35(1):1-25.
- , 2006, "Difficulties Encountered in the Application of the Phenomenological Method in the Social Science", *Análise Psicológica*, 3(24):353-361.
- , 2010, "Phenomenology and the Practice of Science," *Existential Analysis*. 21(1):3-22
- , 2011, "IPA and Science: A Response to Jonathan Smith," *Journal of Phenomenological Psychology*. 42:195-216.
- Glaser ,B.G., & A.L.Strauss, 1967, *The Discovery of Grounded Theory : Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine Publishing Company, 後藤, 大出, 水野訳「データ対話型理論の発見」, 1996, 新曜社
- Glaser ,B.G., 1978, *Theoretical Sensitivity*, Mill Valley, CA: The Sociology Press.
- Glaser ,B.G., 1998, *Doing grounded theory: Issues and discussions*. Mill Valley, CA: Sociology Press.
- Glaser ,B.G., 2002, "Conceptualization: On Theory and Theorizing", *International Journal of Qualitative Methods*, 1(2):1-31.
- Guba, E.G., 1978, *Toward a methodology of naturalistic inquiry in educational evaluation*. Monograph 8. Los Angeles: UCLA Center for the Study of Evaluation.
- Gurwitsch, A., 1964, *The Field of Consciousness*, Duquesne University Press, Pittsburgh.
- Haas ,P.M., 1992, "Introduction: epistemic communities and international policy coordination", *International Organizayion*, 46(1):1~35.
- Heidegger, M., 1935, *Sein unt Zeit*, Halle: Max Niemeyer. 原佑・渡辺二郎訳, 2003, 「存在と時間」中央公論社
- Holroyd, C., 2001, "Phenomenological Research Method, Design and Procedure: A phenomenological investigation of phenomenon of being-in-community as experienced by two individuals who have participated in a Community Building Workshop" *Indo-Pacific Journal of Phenomenology*, 1(1):1-12.
- Husserl ,E., 1950, *Ideen—Zu einer reinen Phänomenologie und pänomenologischen Philosophie*. Erstes Buch, Martinus Nijhoff, Haag. 渡辺二郎訳, 1976 「イデー」みすず書房。
- 伊賀光屋, 1986, 「モニタージュ鑑屋」新潟大学教育学部紀要, 28(1):79-97頁。

- ,1997,「参与観察『蔵』—蔵人の労働と生活」新潟大学教育学部紀要,36(1):129~147頁。
- ,2000,『産地の社会学』多賀出版
- ,2007a,「語りの中の職業コミュニティ—峯村杜氏のインビボ・コード—」新潟大学教育人間科学部紀要,9(2):241-276頁。
- ,2007b,「酒屋仲間と酒造コミュニティ」新潟大学教育人間科学部紀要10(1):21-32頁。
- ,2008a,「科学的現象学の方法論について」新潟大学教育人間科学部紀要10(2):101-116
- ,2008b,「グラウンデッド・セオリーの方法論について」新潟大学教育学部研究紀要1(1):53-81頁
- ,2009,「解釈学的現象学の方法論」新潟大学教育学部研究紀要1(2):151-178
- ,2010,「対話としてのインタビュー」新潟大学教育学部研究紀要2(2):135-163
- ,2011,「インタビューの中の対話と独話—保田染五郎の談話分析—」新潟大学教育学部研究紀要4(1):51-63
- 伊勢田哲治,2003,「疑似科学と科学の哲学」名古屋大学出版会
- Islam,N.,1983, "Sociology, Phenomenology and Phenomenological Sociology", *Sociological Bulletin*,32(2):134-452.
- Jarman, M., J.A. Smith, & S. Walsh, 1997, "The Psychological battle for control: a qualitative study of health care professionals understandings of the treatment of anorexia nervosa," *Journal of Community & Applied Social Psychology*. 7:137-152.
- 神戸早紀・末武康弘,2011,「質的研究法としての解釈学的現象学的分析（IPA）の具体的な手続きについて」心理相談研究2:119-132
- King,N.,1998," Template Analysis", in G. Symon & C. Cassell (eds.), *Qualitative Method and Analysis in Organizational Research: A practical guide*. London, Sage. 118-134.
- Kvale,S.,1983, "The Qualitative Research Interview: A Phenomenological and Hermeneutical Mode of Understanding", *Journal of phenomenological psychology*,14(2):171-196.
- , 2006, "Dominance Through Interview and Dialogue", *Qualitative Inquiry*,12(3):480- 500.
- Kvale, S., & S. Brinkman, 2009, *InterViews: Learning the Craft of Qualitative Research Interviewing*, second edition, Los Angeles :Sage
- Lakatos, I., 1978,*The Methodology of Scientific Research Programmes: , Philosophical Papers vol.1*, Cambridge : Cambridge University Press 村上陽一郎訳「方法の擁護—科学的研究プログラムの方法論—」新曜社 1986
- Larkin, N., S. Watts, and E. Clifton, 2006, "Giving voice and making sense in interpretative phenomenological analysis
- Lincon, Y.S., & E.G.Guba,1985, *Naturalistic inquiry*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Mall, R.A., 1993, "Phenomenology — Essentialistic or Descriptive ?", *Husserl Studies*,10:13-30.
- McPhail, C., & C.Rexroat,1979,"Mead vs. Blumer: The Divergent Methodological Perspectives of Social Behaviorism and Symbolic interactionism", *ASR*, 44:449-467
- Merleau-Ponty, M., 1962, *Phenomenologie de la of Perception*. London: Routledge. 竹内・小木訳「知覚の現象学」みすず書房, 1967-1974
- Miller, W.L., & B.F.Crabtree,1999, " Clinical Research : A multi-method typology and qualitative roadmap", in B.F. Crabtree & W.L. Miller (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks. California, 3-30.
- ,1999, "The Dance of Interpretation", in B.F. Crabtree & W.L. Mill (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks. California, 127-143.
- Mills, J., A. Bonner, & K. Francis, 2006, "The Development of Constructivist Grounded Theory" *International Journal of Qualitative Methods*,5(1):
- Mills, M.B.& A.N.Huberman,1994, *Qualitative Data Analysis: An expanded sourcebook(2nd ed.)* Sage, Newbury Park, CA.
- 森秀樹,2008,「開示性の自然学的記述の意味」理想 第680号;27~37頁

- Moustakas, C., 1961, *Loneliness*. Englewood Cliffs, NJ.: Prentice-Hall.
- , 1990 (a), *Heuristic Research: Design, methodology and applications*, Sage, Newbury Park, CA.
- , 1990 (b), *Heuristic Research: Design and methodology*, *Person-Centered Review*, 5(2): 170-190.
- , 1994, *Phenomenological Research Methods*, Sage, Thousand Oaks, California.
- Packer, M.J., 1985, "Hermeneutic inquiry in the study of human conduct", *American Psychologist*, 40:1081-1093
- , 1989, "Tracing the Hermeneutic Circle: Articulating an ontical study of moral conflicts", in M.J. Packer & R.B. Addison, (eds.) *Entering the Circle*, State University of New York, Albany, N.Y., 95-117.
- , 1989, Packer M.J., & R.B. Addison, 1989, "Evaluating an interpretive account", in Packer M.J., & R.B. Addison (eds.), *Entering the Circle: Hermeneutic investigation in psychology*, Albany, State University of New York Press. 13-36.
- , 1991, "Interpreting Stories, Interpreting Lives: Narrative and Action in Moral Development Research", in M.B. Tappan & M.J. Packer (eds.), *Narrative and Storytelling: Implication for Understanding Moral Development*, *New Directions for Child Development*, 54: 63-82.
- , 2000, "An Interpretive Methodology Applied to Existential Psychotherapy", *Methods Annual Edition*, 493-514.
- Palmer, R.E. 1969, *Hermeneutics: Interpretation theory in Schleiermacher, Dilthey, Heidegger and Gadamer*. Evanston, IL: Northwestern University Press.
- Patton, M.Q., 1990, *Qualitative evaluation and research methods*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Pollio, H.R., T.B. Henly, C.J. Thompson, J. Barrell, & M.D. Chapman, 2006, *The Phenomenology of Everyday Life*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Pollio, H.R., T.R. Graves, & M. Arfken, 2006, "Qualitative Methods", in F.T.L. Leong, & J.T. Austin (eds.) *The Psychology Research Handbook: a guide for graduate students and research assistants*. Los Angeles: Sage. pp. 254-274.
- Pollio, H.R. & M.J. Ursiak, 2006, "A Thematic Analysis of Written Accounts: Thinking about Thought", in C. Fischer (eds.) *Qualitative research methods for psychologists: introduction through empirical studies*. Elsevier: Academic Press.
- Rennie, D.L., 1998, "Grounded Theory Methodology: The Pressing Need for a Coherent Logic of Justification" *Theory & Psychology*, 8(1): 101-119
- , 2000, "Grounded Theory Methodology as Methodical Hermeneutics" *Theory & Psychology*, 10(4): 481-502
- , 2007, "Hermeneutics and Humanistic Psychology", *The Humanistic Psychologist*, 1: 1-26
- Rennie, D.L., & K.D. Fergus, 2006, "Embodied Categorizing in the Grounded Theory Method", *Theory & Psychology*, 16(4): 483-503
- Ricoeur, P., 1965, *De l'interprétation, essai sur Freud*, Editions du Seuil, ポール・リクール「フロイトを読む—解釈学試論」久米博訳 新曜社 1982年
- Robinson, W.S., 1951, "The Logical Structure of Analytic Induction," *American Sociological Review*, 16(6): 812-818.
- Ryan, G.W., & H.R. Bernard, 2003, "Techniques to Identify Themes", *Field Methods*, 15(1): 85-109.
- Ryan, G.W., & T. Weisner, 1996, "Analyzing words in brief descriptions: Fathers and mothers describe their children", *Cultural Anthropology Methods Journal*, 8(3): 13-16.
- Sartre, J-P., 1956, *L'Être et le néant - Essai d'ontologie phénoménologique* -. Gallimard, 1970 松波訳「存在と無」筑摩書房, 2007-2008.
- Schleiermacher, F., 1998, *Hermeneutics and Criticism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, J.A., 1994a, "Reconstructing selves: An analysis of discrepancies between woman's contemporaneous and retrospective accounts of the transition to motherhood," *British journal of Psychology*, 85: 371-392.
- , 1994b, "Towards reflexive practice: Engaging participants as co-researchers or co-analysts in psychological inquiry," *Journal of Community & Applied Social Psychology*, 4: 253-260.

- , 1995, "Semi-Structured Interviewing and Qualitative Analysis," in J. A. Smith, R. Harré, & L. VanLangenhove (eds.), *Rethinking Methods in Psychology*, London: Sage
- , 1996, "Beyond the divide between cognition and discourse: Using interpretative phenomenological analysis in health psychology," *Psychology & Health*, 11:261-271.
- , 2003, *Qualitative Psychology: A Practical Guide to Research Methods*. London, Sage.
- , 2004, "Reflecting on the development of interpretative phenomenological analysis and its contribution to qualitative research in psychology," *Qualitative Research in Psychology*, 1:39-54.
- , 2007a, "Hermeneutics, human sciences and health: linking theory and practice," *International Journal of Qualitative Studies and Well-being*, 2:3-11.
- (eds), 2007b, *Qualitative Psychology*. London: Sage.
- , 2010, "Interpretative Phenomenological Analysis: A Reply to Amedeo Giorgi," *Existential Analysis*. 21 (2):186-192.
- , 2011, "Evaluating the contribution of phenomenological analysis: areply to the commentaries and further development of criteria," *Health Psychology Review*, 5(1):55-61.
- Smith, J.A., R.Harré, & L.Van Langenhove, 1995, "Idiography and the Case-Study," in . A. Smith, R. Harré, & L. VanLangenhove (eds.), *Rethinking Psychology*. London: Sage.59-69.
- Smith, J.A., R.Harré, & L.Van Langenhove, 1995, *Rethinking Psychology*. London,Sage.
- Smith, J. A., M. Jarman and M. Osborn, 1999, "Doing Interpretive Phenomenological Analysis," in M. Murray & K. Chamberlain (eds.), *Qualitative health psychology: theories and methods*, London: Sage.
- Smith, J.A., P.Flowers, & M.Larkin,2009, *Interpretative Phenomenological Anelysis: Theory, Method and Research*. London: Sage.
- Smith, J.A., & M.Osborn, 2003, "Interpretative phenomenological analysis," in J.Smith (eds.) *Qualitative Psychology: A Practical Guide to Research Methods*. London Sage.
- Spiegelberg,H.,1982, *The Phenomenological Movement*, Martinus Nijhoff, Hage, 立松弘孝監訳「現象学運動」世界書院
- Strauss,A.L.&J.Corbin,1990, *Basics of Qualitative Research : Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*, Thousand Oaks, California, Sage Publications,1998, 操, 森岡訳「質的研究の基礎」,1999, 医学書院
- , 1994,"Grounded Theory Methodology," in N.K. Denzin, & Y.S. Lincoln, *Handbook of Qualitative Research*, Thousand Oaks, Sage Publications.
- Strauss, C., & N. Quinn, 1997, *A cognitive theory of cultural meaning*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Streeter,R.,1997,"Heidegger's formal indication: A question of method in *Being and Time*", *Man and World*,30:413-430.
- Tiryakian, E.,1 965, "Existential phenomenology and sociology" *ASR*,30:674-688.
- Van Maanen, J., & S.R. Barley, 1984, "Occupational communities: culture and control in organizations", *Research in organizational behavior*, 6: 287～365.
- Van Maanen, J. 1988, *Tales of the Field: On Writing Ethnography*, Chicago, The University of Chicago Press.
- Van Manen, M.,1990, *Researching Lived Experience — Human Science for an Action Sensitive Pedagogy*, State University of New York Press. London Ontario, Canada.
- Varela, F.J.,1996, "Neurophenomenology: A methodological remedy for the hard problem," *Journal of Consciousness Studies*. 3 (4):330-349.
- Varela, F.J., & J.Shear, 1999, "First-person methodologies: What, why, how?" *Journal of Consciousness Studies*.6 (2-3):1-14.
- Willig, C ., *Introducing Qualitative Research in Psychology*, Maidenhead: Open University Press. 上淵・大家・小松訳「心理学のための質的研究法—創造的な探究に向けて—」培風館2003
- Windelband, W., 1980, "History and Natural Science," *History and Theory*, 19 (2):165-185.
- Yardley, L.,2000, "Dilemmas in Qualitative Health Research," *Psychology and Health*.15:215-228.
- Zahavi, D., 2007, "Killing the straw man: Dennett and phenomenology," *Phenomenology and the Cognitive*

Sciences.6:21-43.

Znaniecki, F.W.,1934, *The Method of Sociology*, New York: Farrar & Rinehart.